

教職員紹介



障がい学生支援コーディネーターである松岡希さんは、本学社会福祉学科の第4期生です。卒業と同時に社会福祉士国家試験に合格した松岡さんは、1年間障がい福祉施設で働いた後、現職につき、3年になります。障がいのある学生が学内外で活躍

している姿を見るのがこの仕事のやりがいだと松岡さんは言います。本学には素直でやさしい学生が多く、障がいのある学友を常に数人の学生が自然な形で支援ができていて「すごいな」といつも感心させられているそうです。

支援学生との距離のとり方がとても上手な松岡さんは、支援学生からも教職員からもとても信頼されています。

(副学長 原田正文)

バスケットボール部の活躍

第63回全日本大学バスケットボール選手権大会

平成23年11月21日から行われた大会では、関西地区大会を1位で通過し、そのままの勢いで本大会でも数々の強豪校を破り、決勝戦で早稲田大学と戦いました。激闘の末、惜しくも優勝には届きませんでしたが、4年ぶりの準優勝を成し遂げ、大阪人間科学大学の名を全国に轟かせてくれました。



第78回皇后杯 全日本総合バスケットボール選手権大会

平成23年12月30日から行われた日本バスケットボールのNo.1を決める国内最高峰の大会で、社会人チームの新潟アルビレックスBBラビッツと対戦し勝利をおさめ、見事ベスト8を決めました。大学勢がベスト8入りするのは、平成16年以来8年ぶりです。準々決勝では、社会人リーグ1位のチームを相手に、最後まで諦めずに果敢にゴールに向かっていくという攻めの姿勢を見せ続け、素晴らしい試合を見せてくれました。

FD研修会

FDとは、簡単に言うと、授業・教育をよりよくするための大学教員の職能開発(ファカルティ・ディベロップメント)のことです。このニュースで様々な取り組みを紹介しているのもその一環です。今年も3月1日に大学・短大合同研修会が以下の要領のとおり開催されました。

研修名:「教育改善のための教育調査」講演・報告とワークショップ

講師: 武内清先生(千葉敬愛大学特任教授、上智大学名誉教授)

会場: 庄屋学舎 601教室

趣旨: 大学の教育改善が求められ、学習の成果を担保するための様々な施策がすすまられています。その一方で、肝心の学生が大学の教育や大学・教員の働きかけをどう受けとめているかについては十分に検証されてきませんでした。そこで今回の研修会では、講演と調査報告、ワークショップを通じて、学生の意識や文化を実証的な調査によって把握する方法や、それを教育改善につなげる方法を一緒に考えていくことを目指します。

就職支援

平成24年3月卒業の現3年次生の就職活動は、今年度から日本経団連が「採用・選考に関する倫理憲章」を見直したため、例年より2ヶ月遅い12月1日からのスタートとなりました。スタートの遅れに伴い、その後の採用選考についても遅くなれば



良かったのですが、選考については例年通りの4月からとなり、就職活動期間が短縮された学生にとっては、厳しく複雑な就職活動となっております。また、東日本大震災、円高の影響など、就職環境についても厳しく、学生にとっては大きな負担になっています。国もこのような厳しい雇用環境に対応する取組みとして、卒業後3年以内の卒業生に対する新卒枠での応募の受付を各企業に呼び掛けております。しかしながら、既卒の就職は新卒に比べて不利な状況となっています。そのため卒業後一度フリーターになってしまうとそこから正社員になれず、長期間フリーターを続けてしまう傾向があります。

大阪人間科学大学では、スムーズに就職活動が取組めるように、1年次生から卒業後のキャリアについて考える科目を設置しています。1年次に設置している「キャリアデザインⅠ」では、4年間の大学生活をいかに有意義に過ごすか、大学での学びをどのように社会で生かすかについて考えます。2年次に設置している「キャリアデザインⅡ」では、グループワークを中心とし、就職活動また社会に出て必要となるコミュニケーション能力を向上させます。3年次に設置している「キャリアデザインⅢ」「キャリアデザインⅣ」では、就職活動における実践的な内容を学び、3年後期からスタートする就職活動に直結させています。また、個別の支援にも力を入れて取り組んでいます。3年次生の前期と後期に全員と進路について面談を行っています。このような状況において、身近におられる保護者は学生達にとって非常に大きい存在です。就職活動においては、学生・家庭・大学が一体となって就職活動に取り組む事が重要です。今後ともご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

(大学事務室キャリアグループ 伊藤元房)

平成24年3月～平成24年9月 行事予定

3月1日(木)	大阪人間科学大学・大阪薫英女子短期大学 合同FD研修会	
3月22日(木)	学位記授与式	正雀学舎 体育館2階
	卒業祝賀パーティー	ザ・リッツカールトン大阪4階
3月29日(木)	新4年次生対象ガイダンス	庄屋学舎
3月30日(金)	新2・3年次生対象ガイダンス	庄屋学舎
4月2日(月)	新3年次編入学生ガイダンス	庄屋学舎
	新任教職員オリエンテーション	正雀学舎
4月3日(火)	入学宣誓式	正雀学舎 体育館2階
4月4日(水)	新入生対象 学内ガイダンス	OHSホール
	新入生定期健康診断	正雀学舎
	非常勤講師懇談会	庄屋学舎
4月5日(木)	啓発講習会(消費者教育・薬物乱用防止)	OHSホール
	障がい学生に関する講話	OHSホール
	新入生対象 学科別ガイダンス	
4月6日(金)	新入生対象 レクリエーション ガイダンス	
	新入生対象 学友会歓迎イベント	正雀学舎 体育館
4月9日(月)	前期授業開始	
7月30日(月)	前期授業終了	
8月2日(木)～8日(水)	前期試験	
9月21日(金)	後期授業開始	



社会に役立つやさしさを学ぶ
大阪人間科学大学

発行:平成24年3月 発行者:大阪人間科学大学FD委員会 編集委員会
編集責任者:原田正文
お問い合わせ先:大阪人間科学大学 〒566-8501 大阪府摂津市正雀1-4-1
TEL:06-6381-3000(代表) email:ohs-fd-pro@kun.ohs.ac.jp

CHANGE!

大阪人間科学大学 FD ニュース vol.4

あかりプロジェクト2011

Osaka University of Human Sciences FD News vol.04 2012

対人援助分野における専門職育成に重点をおいた新体制が始まります

大阪人間科学大学 学長 齊藤 公男



大阪人間科学大学は平成13年に設立され、本大学の母体である学校法人薫英学園の建学の精神「敬・信・愛」をふまえ、「社会に役立つやさしさを学ぶ」をスローガンに掲げ、人と人との関わりに大切な「やさしさ」を磨き、社会から求められる人材の育成に努めてきました。

本学におきましては、開学10周年を機に更なる一歩を踏み出すため、来る4月から、現行の「社会福祉学科」、「健康心理学科」の2学科に加え、新たに「医療福祉学科」、「子ども福祉学科」、「医療心理学科」の3学科を開設し、大学の基本理念をふまえ、対人援助分野における専門職の育成に重点をおいた5学科の体制で新しくスタートいたします。

平成24年4月以降、大阪人間科学大学は新たな学科体制の下で「自立と共生の心を培う人間教育」、「学士課程教育の重視」、「地域社会への貢献」を自ら実践するとともに、学生に対する面倒見の良さを通して「やさしさ」を社会に広めていく力を養うための、オンリーワンの教育環境を提供してまいります。

在学生・保護者の皆様におかれましては、新たな大阪人間科学大学の今後の運営に対しまして、これまでと変わらぬご支援・ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

そら～星に願いを～ あかりプロジェクト2011

夜の公園には星空や七色の流れ星、震災への復興に願いを込めた光の街が演出された、「あかりプロジェクト2011」が開催されました。大学祭初日で地域住民や卒業生らが約500人が参加していただきました。また今年度は地域のプロジェクトとして展開し、祭りやイベントにも参加しました。そして地域住民や行政・企業と連携し12月に摂津市立コミュニティプラザ周辺を会場に「南千里丘エコイクフェスタ with あかりプロジェクト2011」を開催することができました。

今年度は、実に多様な活動を展開してきました。学内では、イベントや交流サロンで、作品展示やキャンドルづくりのワークショップを行いました。また学外では、阪神百貨店で忘れ物の傘をリサイクルしたオブジェを制作、大阪くらしの今昔館(大阪市立すまいのミュージアム)の10周年記念「大つくりもの展」では海の風景をデザインした灯籠の制作、摂津市ろうそくファンタジーのペットボトルアートコンクールで「モミジ」をテーマに「光で賞」を受賞、摂津市環境フェスティバルでは、リサイクルキャンドルのワークショップをしました。ご参加、ご協力いただき本当にありがとうございました。

(環境・建築デザイン学科 准教授 吉田 幸代)

双方向の授業を広げたい！ ～レスポンス・アナライザ～

平成23年6月30日に「レスポンス・アナライザ（聴衆応答システム、通称：クリッカー）」に関するFD研修会を開催しました。本研修会は、「レスポンス・アナライザ」を本学として導入することを前提に実施するものではなく、「双方向の授業を広げていくために、そのツールを紹介する」という趣旨で開催したものです。

クリッカーとは電子投票・集計システムです。教員が発する質問に対して学生がカード型のリモコンで回答することで、クイズ番組のようなやりとりが実現できる仕組みです。教員が選択回答式の質問を出題し、学生がカードのボタンを押すと、無線信号がパソコンに送られ、集計結果は瞬時にプロジェクターに投影されます。

単なるクイズだけでなく、講義開始時や終了時に復習や確認の小テストを短時間で実施することや、結果を見ることで学生同士が考えを持ち寄り意見を交換すること、個人の心理や価値観などを匿名性を保ちながら質問・共有できることなど様々なメリットがあります。

演習や実習形式の授業では、授業中に学生の理解度を把握し、学生とやり取りしながら授業を進めていくことは比較的容易ですが、知識の獲得を主な目的とした科目の多くでは、教員が教えるという一方方向の授業になりがちです。従来は小テストをしたり、学生に質問をするという形で理解度を確認してきましたが、十分ではありませんでした。小テストは理解の把握はできますが、授業の中で直ちに対応することはできません。また、学生にマイクを向ける、あるいは手を挙げさせるという方法は直ちに対応はできませんが、マイクを向けても答えない、あるいは手を挙げない、ということではなかなかうまくいきませんでした。クリッカーを使用すると、学生の理解度の把握が即座にでき、対応が可能になります。

講義をしている教員は学生の顔から理解度などについて見当をつけるのですが、学生本人や学生同士にはそれはわかりません。小まめに理解度を確かめること、即座に結果を返すことは学習効果を高める基本的な原則にもかなうことです。

学生からもボタンを押すことで講義への参加意識が高まり、自分とは異なる意見を持つ人の存在、自分の位置づけなどがわかるという気づきのきっかけにもなっているようで、好評です。

これはツールの一つですが、今後も様々な形で教員・学生双方に有益で効果的な授業を工夫していきたいと考えています。

試験的にクリッカーを導入して

この研修会の後、さっそくクリッカー（KEEPAD）を購入し、「心のケア専門職養成講座」と教職課程の講義で使用しています。

どのような場面でクリッカーを使用しているのかについて、教職課程の講義「学習・発達論」での実践から報告します。この講義では専門用語や疾患名がよく出てきます。そのため、それらの用語を「どの程度理解しているのか」を事前に把握するためにクリッカーを使用するというのが一つの使用例です。例えば「自閉性障害の子どもに、実際にかかったことがありますか」という問いについて、「①頻繁に関わったことがある、②数回関わったことがある、③直接関わったことはない」という3つの選択肢を呈示し、学生に回答させます。こんな簡単な質問でも受講している学生の状況が把握できます。この質問では、一人の学生が①と回答しました。そこで、彼にどのような場面で？と聞きますと、障害者施設でボランティアをしていると言います。このようにクリッカーというツールを使うことで、学生との会話が生まれます。

あるテーマについて説明した後、「今の説明でわかりましたか」という質問をすることもよくあります。回答の選択肢は、①よくわかった、②まあまあわかった、③もうひとつよくわからない、④まったくわからない、です。理解がまだできていないことがわかると、もう一度、説明をしておすこともあります。

「心のケア専門職養成講座」は、本学が文部科学省の委託事業「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」として平成19年度から平成21年度までの3年間実施していた「心の問題を抱えた児童生徒や若者を支援する専門職の理論的力量および実践力養成事業」を引き継いだものです。今年度の受講者は90人程で、ほとんどが現役の小・中・高等学校の教員です。90人という多人数ですので、クリッカーの利用価値は高いです。特に回答が匿名ですので、すなおに回答できるのがいい点です。回答結果を見ながら、受講生と会話ができるのもクリッカーのいいところです。

まだまだクリッカーの使用方法にも工夫できるところがあるように思いますが、授業改善という点では、このクリッカーを使用した双方向の授業は効果が期待できます。

(副学長 原田正文)

「保護者懇談会・本学の教育に関するアンケート」の結果概要と今後の取組みについて

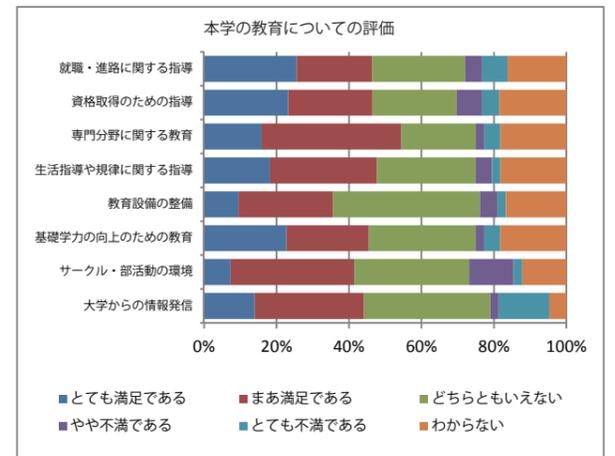
平成23年10月30日に保護者懇談会を開催し、出席者の方に懇談会への満足度や本学の教育に関する情報提供の在り方の指針とするためにアンケート調査を実施いたしました。ここに調査結果の概要をお知らせいたします。

今回は3回目の実施で52名の方に回答をいただきました。前回は3回生の保護者が大半を占めていましたが、今回は各学年から保護者の参加がありました。懇談会では、全体会として就職活動の動向などの説明が行われ、その後でFA やゼミ担当教員との個別相談会が開催されました。全体会や学科別説明等につきましては約6割の出席者から満足であるとの回答をいただきました。

当日の相談の内容では、日々の学習や生活の様子から資格取得や就職までさまざまですが、学年を問わず最も関心の高い内容は就職についてでした。アンケートの結果でも、大学からの情報提供の要望として、「就職について」が最も多く（とても必要78%、ややを含めると95%）挙げられていました。

図に「本学の教育についての評価」についてのアンケート結果を示しています。専門分野に関する教育への評価は高いものの、就職・進路に関する指導について「どちらともいえない」「わからない」という回答がかなりありました。就職・進路については、実際には本学ではかなり綿密に指導・助言等をおこなっています。今後さらに情報提供をし、保護者との連携に努める必要があります。今後も学生や保護者のみなさまの声を大切にまいりますので、お気軽にご意見をお寄せください。

(健康心理学科 講師 佐野秀行)

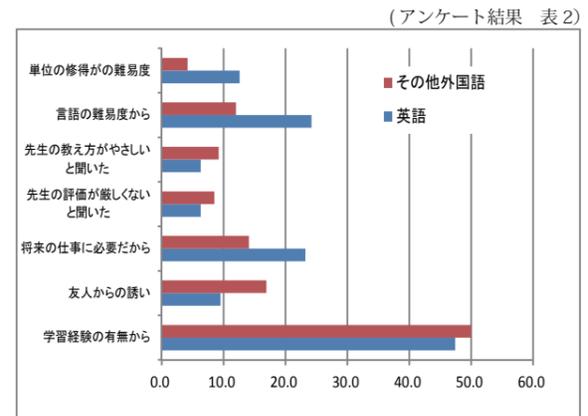


外国語科目受講者へのアンケート

この調査は、1年次生を対象に、外国語科目の履修選択理由を調査することを目的に行いました。FA 演習の授業時間に調査を実施し、在籍者数221名中156名(回収率70.6%)から回答を得ました。

(学生の履修選択状況 表1)

科目	英語	中国語	ハングル	ドイツ語	フランス語	合計
社会福祉	49	39	24	27	22	161
環境・建築	15	12	3	0	6	36
健康心理	31	28	21	14	9	103
全体	95	79	48	41	37	300



英語は他の外国語と比べて履修決定において、次のような特徴があると言えます。

(1) 言語への興味よりも学習経験、新たな言語を学ぶのが難しそうだという、消極的な選択理由を挙げる学生が多い。また将来の仕事に必要になりそうだと考えて実際上の必要から履修する学生が多い。

(2) 友人からの誘い、教え方や評価のやさしさについての口コミといった学習前の親しみやすさは他の外国語の選択理由に挙げられることが多い。

外国語担当の教員は、(1)の点については、学習の動機付けのさらなる工夫が必要であると言えますし、(2)については、教え方や評価のあり方について考える必要があると言えます。

(健康心理学科 教授 平柳行雄)

授業の取組み① 精神保健福祉援助実習

精神保健福祉士の資格取得を目指す学生は、4年次に現場実習に臨みます。事前学習にしっかりと取り組むことは、多くの学びを得ることにつながります。

本学では、3年次に通年にわたる事前学習を行います。前期には、小グループで保健所、精神科医療機関、そして地域の障害福祉サービス事業所に向き、そこで働く精神保健福祉士にインタビューを実施します。この取組みでは、精神保健福祉士の仕事の実態を聴き取るだけでなく、準備から訪問先との連絡・調整を学生たちが行うことで、精神保健福祉士に求められる基本的な技術を体験します。後期には、先輩学生による実習報告会、精神障害当事者や卒業生を中心に各領域で活躍している精神保健福祉士による講義、そして現場実習に向けた知識の確認テストや面接を実施しています。

このような取組みから現場実習につなげ、実践力のある精神保健福祉士を多数輩出しています。

(社会福祉学科 助教 富澤宏輔)

授業の取組み② 学生による農小屋づくり

農小屋づくりは、環境・建築デザイン学科の学生が、現場を管理する工務店の職人に指導を受けながら、基礎を除く建設の全工程を行ったもので、授業・演習の一環として計画されました。



農小屋は、延床面積が約10㎡の平屋で、工法は一辺100mmの角材（一般には柱として使用）を寝かせ、縦横に積み重ねる校倉づくりで、災害時に誰もが施工に関われるよう配慮されています。建設作業は平成23年11月中旬から12月中旬の6日間に行われ、建築デザインコースの

4年次生8名が各日4～5名ずつ参加しました。

学生によって関わった作業内容は異なりますが、経験と勘が必要な現場作業はそれぞれに貴重な経験となったようです。最後に行った屋上の緑化作業には、工程を一通り体験した学生3名が参加しました。下で練った土と敷地周辺にある雑草を屋根に運ぶ作業は重労働でしたが、作業を終え、完成した小屋をみる学生の表情に誇らしさがみられました。

最後に、もう一点。作業終了後、農小屋を運営する“かんでんエルハート”の担当者を交えた懇親会で、担当者から「あなたたちが小屋づくりに関わったという痕跡を、この小屋にさりげなく残してほしい」と温かい言葉がかけられたことを記しておきます。

(環境・建築デザイン学科 助教 増田亜樹)

授業の取組み③ 模擬授業（マイクロティーチング）

教職課程を履修している2年生は約15名います。2年生の後半になって教職を目指すための準備が本格化してきました。教員採用試験の準備はもちろん大切ですが、生徒に教えるための授業力がなにより大切です。4年次の教育実習、将来の授業のための練習として着慣れないスーツを着て模擬授業をしています。

中学・高校の標準的授業時間は50分で、限られた時間の中で数をこなすのは大変ですので、小さな課題ごとに学生が授業の一部を担当し、担当教員の講評と学生同士のディスカッションをする、マイクロティーチングをしています。これまで教育を受ける立場でとらえがちだった学生も教育をする立場で考えてみると、教えるための知識・自信・技術で様々な課題がある事を痛感していますが、それと同時に教えることの楽しさにも気づき始めているようです。

(健康心理学科 講師 佐野秀行)



(写真はそのときの一コマ)